
切望ビリー

及川葉月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

切望ビリー

【Nコード】

N3936J

【作者名】

及川葉月

【あらすじ】

大阪市内は某所にあるアパートの一室で女性3人の遺体が発見された。容疑者は18歳の少年、明正寺瞳真。裁判所は彼の判決は難しいと難航する。理由は「解離性同一性障害」。主人格の隼人、保護人格の准一、交代人格の杏奈でさえも事件のことは把握していなかった。大阪府警察捜査一課の上原は「もしかして、誰も知らない人格がいるんじゃない？」と推測する。

刑事部 捜査一課（前書き）

ジャンルを「推理」にしていますが、正直、推理ものとしては微妙です。

以上、言い訳。

刑事部 捜査一課

デスクの上には数枚の画用紙が散らばっていた。白紙ではなく鉛筆で「木」の絵が描かれているが、どれもタッチが違うことから同一人物が描いた絵ではないっぽい。

それを眺めている巡査部長の上原は腹の底から溜め息を吐いた。なんでも、上原の後輩、警部の菅原すがわらが「すべて今回の容疑者が描いた絵です」と答えるからだ。

「複数犯？」

「単独犯です」

上原の問いかけに即座にそう答えて菅原は手にしていた資料を奴さんに渡す。

バストアップの写真と全身写真2枚が掲載された次のページに、その被写体となっている人物の詳細が書かれてあった。

明正寺瞳真みょうしやうていとうま。十八歳。二歳の頃に父親が児童虐待の容疑で捕まり、その後、彼の精神病の治療にあたった精神科医、明正寺千秋みょうしやうじちあきが特別養子組んで以来、明正寺千秋とその妻、明正寺愛里沙みょうしやうじありさと生活を共にしているとのことだった。高校にも通学し、学校内での生活は至って普通で特に問題を起こすことのない真面目な生徒であるという。

「母親は」

渡された資料に目を落としながら上原が煙草を銜える。海外銘柄のヒップホップだ。慣れた手付きで火をつけ、一口吸う。その横で菅原が「再婚相手に殺されたみたいです。被疑者は今、服役中ですけど会います?」と聞いた。上原は真顔で「結構だ」と返す。

「今回の容疑者は俗に不良ってやつか。金髪だし、ピアスなんかついて、鼻にもついてんじゃん。マゾなの? マゾなのか? 変態じゃねえか」

「他にもアンパング、ドルフィン、ピュビックにも施術してるみたいです」

「エドウィン?」

「ドルフィン。男性器の裏筋から尿道を通ってまた裏筋に戻るピアスのことです。アンパングは亀頭を横に貫通し、ピュビックは男性器の付け根に開けるそうです。写真では写ってませんが」

「そりゃ写せねえだろ」

「話は最後まで聞いて下さい。写真には写ってませんが、彼、背中に天馬と腕に龍の刺青を彫ってあるんです」

「天馬?」

「翼の生えた馬、ペガサスですね」

「やっぱマゾだな。変態だ。さすが容疑者だけのことはある」

容疑者Ⅱ変態。という見方でもしているのだろうか。確かに人を

殺すあたりで常識人とは言い難いか。

妙な見解に納得しかけている菅原の横で上原は短くなった煙草の火を灰皿で揉み消し、二本目に火をつけていた。高をくくっているというか、余裕というか、なめているとしか思えない態度だ。

「超常現象って、信じますか？」

その菅原の質問は今までの流れからするとその質問はだいぶわき道にそれていた。腕を伸ばし、背筋を伸ばしていた上原から、なんだ？ と間拔けな声が出る。

「超常現象って、ポルターガイストとか？」

「信じないですよね」

「ネッシーは信じてるけど」

「夢見がちなんですネ」

「超常現象がどうした」

「明正寺瞳真は今、拘置所にいるんですけど自分がやったことを全く覚えていません。それどころか、突然暴れだしたりして、特に男性を怖がります。けど、今まで怯えていたかと思えば静かに喋りだしたり、時々女の子みたいに話をしたりして」

「解離性同一性障害なんだろう」

推測

自分が言いたかったことを言い当ててきた上原に、信じるんですか？ と菅原は驚いていた。「精神病」という脳には特に異常もないが心に異常があるというあやふやで曖昧な病気を上原が信じるとは思わなかったようだ。

菅原は、科捜研での研究結果をまとめた資料と、今回の事件を担当する黒河弁護士が被告人から聞いた話を文にしてまとめた資料の二つを上原に渡した。

「主人格が隼人^{はやと}。十八歳の高校三年生か。明るくて活発で普通の男の子。漫画の主人公みたいな奴だな」

「その次に准一^{じゅんいち}。二十歳の大学生みたいです。離人症を患っていて全ての人格の相関を把握する保護人格です。その次に第三の人格、杏奈^{あんな}。明正寺千秋に好意を寄せていて、奥さんの愛里沙さんを嫌悪しているみたいです」

それを聞き、妙な間を作った上原がパツと顔をあげた。

「人格ってこれだけ？」

少し驚いた風に「これだけですけど」と返す菅原。眉間に皺を寄せ、妙だな……。と上原が呟いたあと、菅原が、妙？ と返した。

「暴力的な人格が一人もいない」

「あ、忘れてた」

間拔けな菅原の声が聞こえてきたところで上原も気付いたのか、この資料には明正寺瞳真^{みょうしょうじとうま}、本人の基本人格の記録がなかった。しかし菅原の言おうとしているのが分かったのか上原は真顔で「でも人は殺さないだろ」と返した。拍子抜けした菅原から更に間拔けな聞き返しが聞こえる。

「容疑者は父親から性的虐待を受けたんだろ。この病気を患う子は圧倒的に親から性的虐待を受けた子が多い。おそらく男性を怖がったのは明正寺瞳真自身、基本人格だ。そんな人間が人を殺せるとは思えない」

「じゃあ一体誰なんでしょうか」

その菅原の掠れた声に反応するかの如く、上原はすつと息を吸い、はっとする。

「もしかして、誰も知らない交代人格がもう一人いるんじゃないのか？」

上原の見解に菅原は、一度は納得するが、「ですけど、弁護士の黒河さんは「准一による供述では人格は以下の通り、隼人、准一、杏奈の三人」と断言されています。明正寺瞳真を保護する役割である人格が、たった一人の人格を見過ごすなんて思えませんか」 と上原の考えを否定した。

「共犯って可能性は」

「有り得ません」 やけにハッキリと言い切る。思わず上原から、

そう……。と無意識に言葉が漏れていた。銜えている煙草を落としてしまう。

「容疑者は過去何十回も自殺未遂を繰り返していますが、それを全て准一が止めています。そんな自殺を止める人間が人を殴るような人格を庇いますか？」

確かに。上原は煙草の紫煙を吐くことで同意を示し、何も言わなかった。

少しくらい反応しろよ、と胸中で毒づく菅原は弁護士から受け取った資料を指差し、「それ、絶対に目通しといて下さいね」と、語尾を荒げ、踵を返して上原のデスクから離れていった。

新人の女の子が淹れてくれたブラックコーヒーを飲みながら上原は菅原に言われた通り大人しく、黒河氏から受取った明正寺瞳真自身の出産を記した資料を読んでいた。

明正寺瞳真

みしょうしょうじどうま
明正寺瞳真について。

一九九一年 八月 二十三日生まれ A型 身長一七六センチ
体重六三キロ。

大阪府摂津市出身。母・頼子の供述によると、父・嵯峨根博昭さがねひろあきによる性的虐待並びに暴力が約半年続いていた。

暴力に関しては煙草の火を押し付ける、ビール瓶などで殴るなど、傷跡が背中に集中。性的虐待については、入浴時並びに嵯峨根頼子りこの外出時、夜中に行われていたとされる。

入浴時には不必要に体を触る、場合によって自分の生殖器を触らせ、自慰行為の手伝いをさせるなど。

嵯峨根頼子の外出時、夜中は挿入を伴う性行為の強要。口止めとして暴力を振るっていたと看做される。

当時二歳だった嵯峨根瞳真の異変に気付き、実父による虐待が明らかになった。

頼子は嵯峨根博昭を訴え、離婚。のちに嵯峨根博昭は嵯峨根頼子の供述と、家宅捜査で発見された物的証拠で虐待の容疑が立証され十年以上の懲役が可決。尚、一度仮釈放されているがそのあいだに大阪府在住の小学一年生の女兒を誘拐し、強制わいせつ罪の容疑で再逮捕され、現在服役中。

翌年 二月

嵯峨根頼子が美多直樹みななおき（当時32歳）と再婚。

同年 六月

美多の会社が倒産。

美田直樹は家にこもるようになり酩酊状態で嵯峨根頼子と瞳真に暴行を繰り返す。

瞳真の前での生殖器の露出、嵯峨根頼子との性行為を見せるなど、時には瞳真自身に性行為に及んでいたとされる。

同年九月

酩酊状態に陥っていた美多直樹は嵯峨根頼子を絞殺し、同時に嵯峨根瞳真を監禁。隣人から通報が入り、美多直樹を殺人罪及び監禁罪で現行犯逮捕。裁判所では美多を無期懲役と可決し、現在服役中。

被疑者

資料を読んだあと上原は気分を害していた。そして自分がいかに平穏で文字通り普通の家庭で育っていたかを考えていた。

続けてなにかの参考になればと絶対に参考にはならないだろう、菅原がおいでいった嵯峨根博昭の資料に手を伸ばした。そこには嵯峨根博昭の出生の他、仮釈放中に犯した事件の詳細が書かれてあった。

一九九六年。八月二日、大阪府某所にて嵯峨根博昭は当時、小学一年生、加藤明子を母親の知人を装って誘拐し、自宅に連れ込み強制わいせつ、並びに暴行容疑で再逮捕。病院に搬送された加藤明子は意識不明の重傷を負い、のちに死亡。

同月。加藤明子の遺族、母・安代、父・公彦、長男・耕平によって嵯峨根博昭被告の実刑を死刑と申し立てするも裁判所側は嵯峨根博昭を十年以上の懲役、求刑十三年と可決。

世の中理不尽だったり不条理だったりするもんだなと資料を閉じ、赤渕の眼鏡を外した上原は別件の事件の資料を手にした。

容疑者をまとめたファイルなどを見て裏付けするために時間を費やし、気がついたら定時を過ぎている。

二一時を少しまわった頃、上原と菅原は偶然、同じ時間帯にやつと仕事を終えて同時刻に退社したようで、お互い一人暮らしということもあって晩御飯を行きつけの居酒屋で済ますことにした。

半年前 ― 3人の話 ―

大阪市内の某所にある大阪府立高校の三年E組の教室で明正寺瞳真は窓際に立っていた。

見上げると空は真っ青で、雲ひとつない晴天に便乗してか、太陽光は灼熱で、南から北からと吹いてくる風もこれからの季節に向けて生暖かい。

GWも終わった皐月の気候は真夏よりも暑くて、乾いていた。確か天気予報では今日の大阪は快晴で気温が七月下旬並みに上がると言っていたような気がする。

（隼人。お前就職するのか？）

頭に直接呼び掛ける声がする。筋の通った低目の男の声、准一だった。肉体は瞳真だが、いま人格と精神が支配しているのは明正寺瞳真の中にいる隼人だ。

准一と話をするときには実際に声を出して会話をするしかなかった。

隼人は周りに独り言だと誤解されないために繋がっていない携帯電話を耳に当て「あいつのこと考えると就職がいいのかな」と准一に話した。

（瞳真なら平気だと思う。男が少ない職場を選べばいいし、進学するなら少し厄介なことも出て来るだろうけど、瞳真だってもう子供じゃない。時々取り乱すこともあるけど、少しなら同性と喋ること

だって出来るだろ)

「俺はどっちかっていうと千秋に迷惑掛かるんじゃないかって」

(まあ……、就職出来たら経済的に安定して家を出て行けるだろうけど、おれは易々と千秋と愛里沙が自立を認めるとは思えないなあ……)

「大丈夫だよ。いざってときは俺や准一もいるし、なんだかんだいって杏奈も瞳真のこと考えて行動してるだろ」

(あたしがなによ)

(お前あんまり外に出て来るなよ)

(だったら准一こそあんまり外出ない方が良いんじゃない？ 准一って暗いし、あんたが外出たとき瞳真がボソボソ喋ってるから見られないんだけど)

「杏奈……、久々だと思ったら相変わらずだな」

半年前 ― 傍にいた誰か ―

学校から帰宅し、家でごろごろとしていた隼人が義母の愛里沙にお使いを頼まれ、自転車で十分程度走った先にあるスーパーで頼まれたものを買出し、帰ろうとしたときだった。

店の手前にとめていた自転車に鍵を差し込んでいると背中に声が聞こえた。ひそひそと小声で喋っているようで会話の内容までは聞こえないが、なんとなく自分に關しての話柄のような気がする。

違うかもしれないが念のために隼人は後ろを振り返った。そして振り返ったことを後悔した。

後ろには金髪、茶髪、齒並び最悪、色黒が揃った、いずれも二十代くらいの男二人と、そのどちらかの連れだろう、白髪で汚い化粧を施した下着同然の格好をした女が瞳真を見て立っていた。

目が合い「やっぱそうだ、あいつだって」と指差して声を上げている。隼人には年上の友達がいらないし（というか友達なのか？）准一がいくら他人と分け隔てなく関係を築ける人間だとしてもああいった人種と友情を開花させるとは思えない。杏奈は言わずもがな。従って瞳真が彼等に指差される覚えはなかった。

ズカズカと瞳真に近寄ってきた三人のうち金髪が乱暴な仕草で瞳真の腕を引っ張り、罵声を吐いてきた。奴の喋っている言葉が聞き取り辛いとか、滑舌が悪いとかそんなレベルじゃない。言われている内容に全くもって心当たりがないため隼人は理解に至っていないのである。

引き摺られるように三人に連れ出された隼人は抵抗するた間もなくスーパ―の裏で壁に押さえつけられ、首を絞められた。茶髪の男は、ニキビ、黒ずみ、毛穴の開きを全て取り込んだクレーター面を瞳真の顔に近付け、

「てめー、この間ヴィーナスに来てただろ」とシユールストレミング以上の口臭を吹きかけながら話を続行させる。瞳真の中で杏奈が一気にうるさくなった瞬間だった。

（イヤアアアアア。やめてええええ。死ぬううう。キモイいい。死ぬエエエ。あたしの絹肌にな付くんじゃねえええ）

そして隼人はもう気絶寸前である。口臭で。
准一は隼人を励ましながら、どうにか耐えることを望んだ。

「お前がやった女、俺のカノジョなんだよ。人の女に手を出してんじゃねえよ」

（知るカアアアア、死ぬエエエッ）

（杏奈黙ってっ。隼人もうちよつと我慢してくれ）

「し……、死ぬ……。」

思い余ってそう呟いた言葉を最後に、隼人は気を失った。そのあと准一と杏奈は瞳真の中で妙な言い争いを始めていた。

（あ、あんた出なさいよ）

（いや、いいよ。杏奈出るよ。久しぶりだろ）

(いや、いいって。准一出れば？ 今千秋いないし、出ても意味ないし)

だが結局、瞳真自体は倒れたままで、三人は好き勝手に瞳真の体を殴りつけた。茶髪は馬乗りになり瞳真の顔面を何度も指に嵌めた。厳ついリングを当てるように殴った。口の中を切れまわして吐血したように血が流れて鼻血も止まらず、目の回りが真っ赤に内出血して、地面に叩き潰され、「おら立てよ」と腕を持たれて壁に押さえつけられる。腹部を何度も殴られて、まるで瞳真はサウンドバックのように殴る、蹴るなどの凄惨な暴力を受けた。

通行人は殆どいないにしても、たまたま通りかかった主婦、小学生は見て見ぬふりだった。杏奈は「助けなさいよおおお」と叫ぶが当然、瞳真の中にいる人格の声など届くはずもない。

瞳真の呼吸が危うくなり、全身の力を失った瞳真は全体重を掛けて地面に這うように倒れた。

殺ってしまった。

そう考えに至った三人の不良は顔を見合わせ、慌てるようにその場を去ろうとした。

そのときだった。

金髪君の足首を掴んだ瞳真の手があった。金髪が地面に倒れこんだあと、「痛てえっ」と何度も叫ぶことから相当力が入っているようだ。

「不公平だろ。オレだけ殴られるなんて」

瞳真の口からその台詞が出たあと、奴さんはさっきまで散々殴られていた人間とは思えない程の回復力を見せた。のっそりと立ち上がって口の中に溜まった唾液と血液を痰でも吐き出すように地面に飛ばす。

「殴らせろよ。お前ら一人ずつ」

その台詞を皮切りに、男二人はさっきの瞳真以上に殴られて気絶していた。前歯二本と、奥歯が掛け、耳を噛み千切られては頭を掴まれて顔面を壁に数回叩きつけられ、そのあと倒れこんだところ腹、股間を蹴り倒して気絶に至らせたようだった。

それを一部始終見ていた、逃げることもさえ出来なかった女はなんとか自分だけは助かろうとして瞳真に「何回でもヤラせてあげるから!」とよく分からない交換条件に突っ走っていた。だが今の瞳真はただ標的を「殴る」としか頭に入っていないため、その提案は無視に終わり、瞳真は女の顔を蹴倒し、倒れ込んで仰向けになったところを何度も踏みつけた。

シャツの袖で血を拭き、「あーあー、ばれちゃったあー」と呑気な口調で独り言を話している瞳真に、准一が聞いた。

(お前……、誰だ?)

半年前 | Mid Blast |

「……翼」

准一は瞳真の中に存在する人格を全て把握しているはずだった。しかし、「つばさ」なんて名前の人物は全く知らない。無意識に、ツバサ……？ と聞き返した准一に対して翼が口の端を上げて笑う。

「はじめましてか？ 俺はお前知ってるぜ。ジュンイチだろ？ 離人症っていうビョーキなんだって？」

准一は性的ではないが「機能不全家庭で育った子供」という部分では瞳真と重なる背景があった。准一だけじゃない。杏奈にも、「売春婦の母親から心理的虐待を受けた子供」という背景がある。

「お前だけじゃない、他の奴等も知ってる。杏奈だっけ？ あのうるさい女」

翼の言動に杏奈が（なんですってっ？）と怒号を上げる。

「お前ってアダルトチルドレンってやつだよな。それも典型的な」

（はあ？ なによそれ）

「母親のことを否定しておきながら千秋、千秋って男に現抜かして、愛里沙には風当たり強いし、どっからどう見ても売春婦の母親の生き写しじゃねえか」

（な……っ）

なんでここまで知っている人間に今まで気付かなかったのだろうか。准一は後悔するしかなかった。

「隼人ってやつも、喧嘩出来ねえくせにしゃしゃり出て恥ずかしい野郎だな。まあ使えねえのはお前も一緒か、ジュンイチ。喧嘩も出来ない。日常生活も送れない。存在するだけ無駄な人間っていうのはお前のことを言うんだよ」

（お前、いつからここにいるんだ）

「オレ？ 結構長いよお。ずっと身を潜めてたけど。だからお前らオレのこと知らないんだよ」

（さっきの奴等が言ってたヴィーナスってなんだ？）

「クラブだよ。心斎橋にあるクラブ。そこで先週二人の女の子にナンパされて、一人だけ可愛かったからセックスして、もう一人はブスだったからアナルにバイブ突っ込んで捨てちゃった」

（ちょ……、ちょっと待てよ……。拒絶反応も何も起こらなかったのか？）

「そりゃ起こったよお。まあカッターで腕切ったらその後なんにも起こらなかったぜ。瞳真ってさあ、実父とか義父とかに犯されたんだろ？ 言っちゃえば男としかやってないわけじゃん？ つーことは強ち童貞じゃん？ 女と違って男は童貞なんてあんまり貞節守ってるとは思われないじゃん？ だからカワイソーだなーって思っ
て可愛い子とセックスしたんだよ」

（そんなこととしていいと思ってるのか？ 警察沙汰になるぞ）

「俺のは同意の元だもん。それに強姦だとしても被害者が名乗り出ないと、警察は着手しようがないんだよ。まあ加害者が二人だったら話は別だけどな。まあ取りあえず、オレの活動時間は基本夜中だから、今はそれに備えて寝るわ。あとそれからオレの存在を千秋や他の誰かに口外してみろ」

一旦言葉を切った翼は、徐にジーンズの尻ポケットに手を入れ、中から何かを取り出した。折りたたみ式のナイフだ。刃の部分を突起させ、それで躊躇いもなく腕の静脈を切った。ゆっくりと紅い液体が流れ、「今度は首いっちゃうかもよく？」と翼が笑う。

准一は、（分かった）と言うしかなかった。

翼からは不気味な笑みが消えた。何かに安堵したように長大息を吐き、慣れた手つきで止血をしている。そのあとゆっくりと震えた声が響いた。

「瞳真……。絶対、守ってやるからな」

M i s t a k e

―― 現在 ――

「これが目撃当初の死体写真だ」

何故か自分が得意気になって何十枚の写真を見せる上原に、菅原は「なんですか」と尋ねた。

「捜査一課に昼休みがあると思うな」と返す上原。続けて、「亡くなったのはいずれも二十代前半の女性三名。川島エミリ、花園奈津子、桑名すず。発見された時は既に死後一ヶ月は経過していたらしい」と説明をする。

「顔の切り傷や目からは蛆が大量に発生してますね」

写真からでも腐敗臭が漂ってきそうな死体を難色示した顔つきで繁々と眺める菅原はある一点に集中した。死体が寝ている絨毯の色模様だろうか、他の場所に比べてそこだけ異様に色が濃い。

血痕にしても真っ赤に染まっていないし、一体なんなのか、菅原は「これ、なんですか？」と指をさして上原に尋ねた。上原は「体液」と答える。

「体液？」

「通常、人間は死後五十時間経てば腐敗を始める。この被害者みたいに室内で死ねば白骨化まで一年、か。そうなると死体には蛆が沸

いて蟬が集り、この写真みたいに体液が絨毯や布団に染み付くんだよ」

「こういうのって誰が清掃するんですか？」

「基本的に被害者の身内だな」

それを聞いてどうなのかといえはなんてことないのだが、菅原は怖いもの見たさで繁々と写真を見ていた。

傍らで溜め息を吐く上原は、「で、例の多重人格少年はどうなんだ」と語尾を荒げて菅原に訊いた。ハツとする菅原は「いま拘置所にいます」と上原でも知っていることに返し、そんなことは分かってるんだよ、と一蹴されている。

「これといって何の進展もないですよ。准一は出てきても、瞳真はやってないって言うし、隼人と杏奈は事件のことさえ知りません」

「黒河さんはなんだって？」

「刑法三十九条も最近は通らなくなっているみたいです。未だ精神鑑定中で、瞳真君に責任能力があると診断が下されば彼は有罪です」

「汚い手を使っても無罪にはしないのか、あの弁護士」

「そんな弁護士本当にいるんですかあ？ 大体検事側についてる証言者が真犯人ってもんでしょよ」

「お前は逆転裁判のやり過ぎなんだよ」

その通りのわけで菅原は何も言い返せず、「それにしても厄介ですな」と白々しいことを口にする。といっても事件現場の洗面所、浴室に残っていた髪の毛、使用された凶器から採取された指紋は間違いなく明正寺瞳真のものだと結果が出ているため、厄介なのは事実だ。

「多重人格なんてフィクションの話だと思ってたけど」煙草を啜えながら話す上原。

「むかし深夜番組で解離性同一性障害の女の子観たことがありますよ。父親に虐待されてて、父親と住んでないのに新しい人格が次々と生まれて満足に外出も出来ないんですよ」

そのあと菅原が一人何かを話していたが上原は聞いていなかった。眉間に皺を寄せて神妙な顔つきで下唇に親指を当て、考え込んでいるようだ。

「上原さん？」

菅原の呼びかけに上原はハッと、「明正寺瞳真はどこで刺青を施術したんだ」と訊いてきた。

「友達、とかじゃないですか？」キョトンとして驚く菅原。

「店じゃなくて？ 出来るのか？」

「ええ。刺青は用具さえあれば自分でも施術出来ます」

「けど背中にも彫ってんだろ？」

「だから、友人に頼んだとか」

「店で施術した可能性は」

「ありません。店側が断ると思います」

「なんでだ」

「大体、どこの店行ったって未成年、或いは十八歳未満、学生の人
は断っています」

「もし彫ったらどうなの？」

「青少年保護育成条例違反で彫師が捕まります」

「じゃあ、あの刺青はどうやって入れたんだ？」

「友人か誰かに無理言って入れてもらったんじゃないですか？」

「その知り合いか友人は今どこにいる」

「分かりません」

「調べろ」

「はい」

結局こうなのかよと泣きたい気持ちでいっぱい菅原の横で上
原はジャケットを羽織っていた。

「聞き込みですか？」

「黒河さんが来てる」

上原はそれだけを言っ
て署を出て行った。

Billy Milligan によろしく

上原に連絡を入れた黒河弁護士は大阪府警のフロントに立っていた。すぐにまた別件の事件を抱えているのだろう、用件を早く済ませるために立ち話を指定してきたのだ。

「黒河さん」

出て来た上原が彼を呼び、黒河が振り返った。

日本人なら葬式帰りと誤解させるブラックスーツに黒のネクタイが海外ドラマに出てくるFBIのように見える。上原は菅原に「ジャージ似合いそう」と言われたことを思い出した。

「すみません。忙しいのに」申し訳なさそうに会釈する黒川氏。

「いーえ。こちらこそ署の方まで来て頂いてすみません。瞳真君に会われました？」

「ええ。随分衰弱しているようですね。出された食事にも殆ど手をつけていないみたいです」

「どうですか、裁判の方は」

上原の問いかけに少し黒河が驚いたように見えた。何か変なことを聞いたかと上原が黒河を呼ぶと彼はハッとし、一言詫びている。

「警察の方って結構、容疑者には厳しい人多いんで。まさか瞳真がやってないことを信じてるとは思わなくて……」

そう言った黒河氏に上原は、やってないんですか？ と目を見開いて聞き返した。口の端を上げて「いや分からないんですけど」と曖昧に返す黒河氏は、容疑者をフルネームでもなく、君付けでもなく、呼び捨てをして言葉を続けた。

「確かに瞳真がやってないという確たる証拠はありません。今の段階では瞳真しか犯行は不可能です。それを覆す証言も証拠も見つらない。仮に、瞳真が責任能力がないと無罪になったとしても、それはただ「責任が取れないから」というだけで有罪を認めているのも同じことです。被害者の遺族は絶対それでは納得しません」

静かに落ち着いて話す黒河氏が腕時計を確認して、少し慌てたような素振りを見せた。上原も自分の時計を確認するが彼と話して五分も経っていない。もう次に行かなければならないのか。

「人格って、あの三人だけですか？」上原が黒河に尋ねた。今になって初歩的な質問を尋ねてくるんだなと黒河は拍子抜けした態度で、そうですけど。と返した。

「黒河さんは知ってますよね。容疑者の背中に刺青が彫られていることは」

「ええ。実際には見てませんけど」

「さっき署で話してたんですけど、あの瞳真君が他人に刺青を彫ってもらうなんて少し妙じゃないですか？」

上原の質問に、確かにと同意を示す黒河が「確か、瞳真には暴力的な人格はいませんでしたよね」と逆に尋ねてきた。つかえたように返事をする上原の目の前で黒河氏の表情が段々、険しくなっ

きていた。何かに気付いたのか。

「基本的に肉体を保守しようとする人格が存在すれば、逆に肉体に危害を加えようとする人格も存在します。二十四人の人格をもつビリ・ミリガンには半分以上が肉体に危害を加えようとする人格だったはずです」

二十四人……。何故か大家族を連想してしまう上原。

「ん？」

上原の声に吊られて黒河が奴さんに顔を向ける。どうかしました？ と上原に尋ねるが上原は相変わらず考え込んだまま、返事という返事をしなかった。

「あ、そうか……。瞳真がやってないって証拠じゃなくてもいいんだ」

黒河が啞然としているのにも全く気付かないまま上原は突然、その場から離れた。急いで署の中に入ろうとするところを振り返って「すみません、未だ分かりませんが、こっちも色々やってみます」とだけ言って中に入ってしまった。

黒河は自分より二回り近く年下の青年に対して、元気だなあ。と呑気なことを言って時計を確認し、慌ててそこから引き返していた。

八階に戻った上原が見たのは、真面目にデスクに向かって瞳真の知人を調査している菅原だった。

「上原さん。一応あたってみましたが、誰も瞳真君の刺青に関し

ては知らないそうです」

「あー、悪い」潔く謝る上原だった。

「よく考えたら瞳真から一人の人格を割り出さなくても良いんだよな。ただ瞳真がやってないって証拠、瞳真以外の人間でも三人の女性を殺害出来たことさえ立証出来れば、容疑者は増える」

「あ、そうか。そこから真犯人を割り出せば……」

希望が見えてきたところで菅原は、「で、どうやってそれを？」と上原に尋ねた。上原は無言で菅原の肩を叩く。

「俺っすか……」

「頑張れ主任。俺は別件の用事があって忙しいから」

そう言っって先輩は自分のデスクに向かい、管轄内で起きた事件の概要を調べていた。横で後輩は言われた通り、現場写真や科捜研でもらった被害者の資料を見て仕事に打ち込んでいた。

1年前 ― CLOVER ―

― 1年前 ―

難波界限にあるダンス・クラブ「CLOVER」では夜中零時を過ぎてても客が帰る気配がなかった。若い子に話しかけてナンパをするなら未だしも、店内の片隅で違法賭博が始まり、ドラッグの売買が始まった。大麻、覚醒剤、麻薬、俗称エクスタシー。それを高校生が軽い気持ちで始めたテレクラで知り合ったおっさんから巻き上げた二、三万で購入する。吸い方を教えるとブローカーが高校生に、スニッフィングを実行させ、酩酊状態にさせる。そこを前歯の欠けた不細工な男が話しかけて限られた人しか入られないVIPルームへ連れて行かれるのがこの「CLOVER」ならではの日常である。

VIPルームに入るまでも、覚醒剤を手に入れた若い男女が店の片隅でセックスを始めたり、雰囲気馴染めない初見客が戸惑いながらもアルコールを浴びる程飲んだり、集団性が生む間違った感覚が覚醒剤に手を伸ばすなどと、今まさに「混沌」が完成されようとしている。

「ここですか」

トヨタの乗用車の運手席に座る上原が上司の星野に尋ねた。助手席に座る星野はここから明かりが少し見える程度の「CLOVER」を見ながら「ガサ入れは初めてか」と聞いた。

「二回目です」

「最初はどこだったんだ」

「宗右衛門町のホストクラブでしたよ。時間外営業とボツタクリ紛いのことしてたんで、その店は一周間の営業停止処分のと潰れましたね」

「店側の人間は警察を恨んでるだろうなあ。あ、合図だ。行くぞ」

「はい」

シートベルトを外してドアを開け、外に出ると星野は無線機を上原に投げ渡した。咄嗟のことに東北訛りで、なんですか、と尋ねる上原に星野は口の端を上げ、「お前が府警にガサ入れ開始時刻を伝えろ」と言った。たったそれだけのことで妙な緊張を覚える上原の返事は曖昧なものだった。星野から、大丈夫かお前。と失笑がもれる。

ドアが閉まっている店内の前で立つホスト紛いの格好をした店の関係者に警察手帳を提示した上原と星野は店のドアを開けてもらったあと、中にいる客と店員にバレないように他の捜査員を誘導し、一斉して中に入り込んだ。

撃つ気はないだろうが威嚇のつもりで客と店員に拳銃を突きつけ、捜査員は客の腕を取って動きを止め、上原は違法賭博を開催しているディーラーの腕を取り、無線機で府警に連絡を入れた。

「○時四十六分。ガサいれ入りました。違法賭博、麻薬売買、売春容疑で確保」

二、三度、時刻とガサ入れ開始の連絡を繰り返し、少しずつ抵抗

の意思を見せるディーラーに、動くな。と柔道と空手で鍛えた腕前を見せつつ、店内の音や独特の雰囲気と空気がなくなっていくのを感じていた。

店の客の三分の二が未成年だった。みんな補導され、辛うじて成人を迎えている客も公然わいせつ罪、

覚醒剤使用、所持で連行され、罪には問われないが一応、署に同行して話を聞くだけの客がたったの数人だった。

青い制服を着た捜査員が各々、一人に手錠を掛けてVIPルームから出て来た。売春の斡旋、麻薬取引、売買の容疑で連行される日本人男性とアフリカ系、ゲルマン系外国人の数人。

最後に出て来た巡査が「すみません、ちょっと」と上原に話し掛けてきた。残っている熱気とアルコールの匂いとでぼんやりしていた上原は黙ったまま、欠伸をしながら巡査のあとをついてVIPルームという別室に入った。

VIPルームは証明がオレンジ色でフロアよりも明るかったが随分廃れていた。電球が小さい上に数が少ない。天井の四方に一つずつ。床は絨毯だった。しかし土足で上がりこむため相当汚れている。

上原が巡査に言われてみたのは、ラブシートの上で大股開いて項垂れている二十歳前後の女性だった。近付いてみると大体送検された女性は化粧の濃い子ばかりだったが、そこで寝ているというか、倒れこんでいる女性はそれ程濃くなかった。化粧が上手いのか知らないが極自然だ。服装も露出度が高いわけでなくむしろ清楚だった。上原は、こんな人でもこんなところに入出入りするんだなと思いがら女性の前にしゃがみ込み、容態を調べた。

「ただ酒飲んだだけだ。一応病院に行ってもらって、そのあと署に来てもらおう」

上原の指示に、はい。と返事する巡査は携帯で近くの救命救急に連絡を入れた。その傍らで上原が女性の頬を軽く叩いて「分かりますかー？」と話しかけた。意識が混濁しているのか、女性は閉じた目を開けたり閉じたりしてハッキリしない。それどころかさっきから何かを呟いている。

「分かりますか？ 警察です」

警察というワードが個人的に引っ掛かったのか知らんが、女性は突然目をガツと見開いて上原を凝視した。大きい目に憧れる女の子はいるだろうが、その大きい目に睨まれた上原はかなりの勢いで引いていた。

「ツバサは？ どこ行っただの？」

「は……、はい？」

「腕に龍の刺青を彫った男。あたし未だ返事聞いてないの」

「へ……、返事？」

「あたしの男になるかどうかよ」

人って見た目じゃないんだと上原が更に引き始めたころ、別の捜査員が上原を呼んだ。その捜査員は開いたドアの前に立っているがドアの向こうは路地裏。確か勝手口は厨房にあったはずだし、この部屋の裏には外から見るとドアなんてなかったはずだった。

上原は立ち上がってフロアの方へ走り出した。外に出てVIPルームにいた人間を連行した捜査員に、腕に龍の刺青が入った男はいたか。と尋ねた。

「いえ……、そんな人はいませんでしたけど……」

Anhalt

― 現在 ―

「十一月二十三日、午後十九時三十六分。城東区にあるアパートの住人から「異臭がする」と城東署に通報が入り、捜査員がアパートの大家に事情を説明して異臭騒ぎのある三〇五号室の鍵を借り、中に入るとリビングに三人の女性の死体を発見。死後1ヶ月が経過していたそうです。使用された凶器は刃渡り二十センチ程のナイフ。メーカーに問い合わせをしたところ、取り扱っている店舗は府内で約三十店舗。購入者の調査の結果、川島エミリが該当し、被疑者の私物ではなかった。その凶器からは明正寺瞳真の左手の指紋のみが検出されています」

* * *

「もう何も出来ないんですかね」

廊下を歩いていると菅原が腕を上には伸ばし、深呼吸をしながらそう言った。続けて、「結局、捜査しなおしても瞳真君のアリバイは立証されなかったわけですし」と横を歩く上原に話した。

「鑑定結果も出るらしいな。多分、通らないか」

自分たちが一人の少年を救えないか、上原は前よりも溜め息をつくのが癖になっていた。

「で、結局、明正寺瞳真に刺青を彫った人物は見つからなかったか」

「ええ。学校での友人、それ以外の知人に電話したあと地域課に聞き込みしてもらったんですけど、誰も明正寺瞳真が刺青を彫っていること自体知らなかったみたいです。一応、大阪全店のスタジオにもあたったんですけど、どの店も該当しませんでしたね」

「刺青か……」

不意に呟く上原に菅原は呑気そうに「上原さんそういうの似合いそうですよね」と賛美なのかよく分からないことを口走っていた。喜んでいいのかもいまひとつ分からない上原は、それはそうと、話を变える。

「もし仮に明正寺瞳真に准一でも知らない人格があったとして、そいつが今回の事件の真犯人なら、両親も可哀想だよな」

「会って話してみますか？」

菅原の提案にさして返事もしなかった上原は見つけた自販機に親指を向け、二人とも「休憩室」とただ窓際にベンチが置かれただけの名ばかりな空間に移動した。

菅原はベンチに腰を掛け、上原が2人分の缶コーヒーを買ってその一つを菅原に渡した。

「被疑者の遺族だって「可哀想」なんだろうな、結局」

言葉を落とすように呟いた上原は菅原の横に間隔をあけて座り、指先で缶のタブを起こした。横で吊られるように同じ行動をとった菅原は飲もうと缶を口にまで運んだが、寸でのところで手を止めた。

横では上原は水でも飲むようにコーヒーを一気に半分くらいまで飲んでる。

「上原さん。被害者の遺族には会われました？」

「いや？ まあ担当検事に話聞いたけど、今回殺されたのは若い子だから両親も、うちの子は未だ二十一歳だ、二十歳だって言って、特に母親は泣き喚いてたって話しだけだな」

「大変ですね……」

「いつものことだよ。嵯峨根博昭が仮釈放中に誘拐した女の子の遺族なんかも相当うるさかったって話だぜ。両親は勿論、お兄ちゃんまでもが死刑にしてくれて頭下げたんだってよ。美しいねえ、兄妹愛ってやつは」

そう言った上原は空になった缶を自販機の横に装備されているゴミ箱目掛けて投げた。

「やっと普通の家庭で生活出来たのに、なんか、掛ける言葉ないですよね」

「未だ決まったわけじゃ……」

自分が言った否定を少し考えたあと、上原は「もう決まったも同然か……。」と肩を落とした。そのあと上原は立ち上がり、菅原の猫毛の茶髪を少し乱暴に軽く叩いて、「行くぞ」と休憩室から出て行った。

「あれ、上原帰んの？」

同期入社の子田に話し掛けられた上原は相変わらず派手な上着を羽織り、ちよつと。と答え、デスクに散らばっている煙草とライター、携帯、財布を全てジーンズの尻ポケットに入れてフロアを出て行った。

エレベーターに向かってゐる途中に通る男子便所から出て来た菅原を捕まえて上原は歩き続けた。菅原はなんのこっちゃ分からず、ちゃんと手洗しましたって！ と声を上げている。

「聞き込み行くぞ。菅原」

「聞き込みって、どこにですか」

ようやく腕を離してくれた上原の後を菅原は小走りについて歩き、二人は署を出て上原の私物であるスバルのレガシイに乗り込んだ。バックミラーを調整し、エンジンを掛けた上原の運転は荒いどころか下手である。

「明正寺家だ」

「だ……、いじょうぶなんですか？ 警察が家宅捜査でもないのに被疑者宅に訪問して」

「大丈夫だよ。ボードに菅原・上原「早退」って書いていたから」

「あんた人のシフト勝手に……」

「警察としてじゃなく、個人的に明正寺の家に行くだけだ」

そう言つて上原はアクセルを強く踏み、十キロオーバーで公道を走っていた。

mon ch?ri

明正寺邸は大黒柱の明正寺千秋が医者というだけあって建ち並ぶ一軒家の中、一際大きかった。

訪れたのが二回目でも未だにこの大きさには圧倒される上原と、自分の家とあまり大差ない菅原は車から降り、門柱にあるインターホンを押した。

「はい。明正寺です」

聞こえたのは男の声だった。明正寺千秋だろうか。上原は大阪府警と言い掛けたのを咄嗟に取り消し、「突然すみません。上原です」と話した。インターホンの向こうから聞こえる返しは、警察の方ですよね？ と声だけでも警戒心剥き出しにしているがよく分かる。

「ええ……。」

消え入りそうな声で返す上原に代わって菅原が「中に入れてもらえませんか」と強硬手段に出たような単刀直入な申し出を入れた。上原の裏拳が菅原の胸よりちよつと上のところに入る。案外痛い。

「どうぞ」

抑揚のない言い方でそう言われた後、受話器を置く音がし、横の門扉が自動的に開いた。二人の立っている位置から玄関までのアプローチが無駄に広くて距離があり、アルコープは相当広い。

再び玄関扉の横にあるインターホンを鳴らし、しばらく待つと明

正寺千秋が出て来た。亜麻色の髪に長袖のシャツとジーンズ。今日は休みだったのだろうか、そのクセ毛のある髪に寝癖がついている。

「どうも」

一礼する上原に明正寺は、眉を下げて少し笑った。それから、どうぞ。と中に二人を招いた。先を歩いてリビングに向かう明正寺は中にいる妻の愛里沙に「お茶用意して」と頼んでいる。その声は血のつながりがないはずの瞳真によく似ていた。

案内されたリビングにあるソファに上原と菅原は間隔をあけて座り、テーブルを挟んだ向かい側に明正寺が腰を掛けた。妻の愛里沙がコーヒーをそれぞれの前に差し出す。

「今日はどういったご用件ですか？」

そう尋ねる明正寺に上原は「今日来たのは捜査とかそういった目的ではないんです」と話した。

「それじゃあ、どうして……？」

「瞳真君自身のこと、もっと詳しく教えてくれませんか」

明正寺は一拍間を置いて、声を上げて笑い出した。上原は勿論、菅原もキョトンとして二人、顔を見合わせている。

「すみません……。警察の方がここまでしてくれるとは思わなかったのだ」

「自分でもそう思います」

「この前弁護士の方と少しお話したんです。こういった複数の女性が殺害された事件は今まで何度もあったのに、今回の事件を担当している警察が今までとは違うから、少し調査にも戸惑っているってあなた方のことだったんですね」

そう言ったあと明正寺はスッと息を吸い、聞きたいことってなんですか？　と二人に聞いた。

「隼人、准一、杏奈の他に、別の人格がいることはないですか？」と上原。

「特に……、いなかったと思いますけど」明正寺が当惑しながら返す。

「そうですか……」

そもそも明正寺千秋がそのことを知っていれば最初に渡された資料にそのことが書かれているはずだ。

ため息をついた上原は資料に書かれていた「養子」のことをふと思いついた。

「そういえば、瞳真君とは養子縁組でも特別養子縁組でしたよね？」

「普通養子だと続柄が「養子」になっちゃうでしょ。僕らは他人の子が欲しいんじゃないって、実の子が欲しいので続柄が「長男」と記される特別養子縁組を組んだんです」

そのあと明正寺は付け加えるように「けど、戸籍を辿っていけば

瞳真の出生が分かりますよ。実母と実父が誰なのかも分かります」と言った。上原が、どうしてですか、と聞くが菅原が変わって「近親婚を避けるためですよ」と言った。

ああそうですか。適当な返事をしながら上原は腕時計を確認した。十四時二十八分。あまり長居しても仕方がないし、有力な情報も得られなかった。

「それじゃそろそろ」と上原が腰を浮かしたとき、マナーモードにし忘れていた上原の携帯が鳴り出した。すみません。と明正寺に一言謝って携帯の画面を見た。そこには「職場」と番号が表示されている。

「あっ、上原っ？　今すぐ戻って来いっ」

吉田の声だった。え？　と聞き返すと向こう側で誰かと喋っている声が雑音のように聞こえ、そのあと「あ、いや戻って来なくて良から今すぐ拘置所に行けっ」と大きい声で指示された。

「拘置所？」と聞き返すと吉田は早口に「明正寺瞳真が暴れだして、刑務官でも抑えきれないみたいなんだ」とまくし立てた。

「え、それで何で俺が……。確か早退って書いたはずだけど」

「どうせサボりだろっ？　それに、いま署に残ってる人間に武道やってきた人いないんだよっ。おまえ有段者だろっ？　いいから拘置所に行けっ」

そして電話を切られた上原はしばらく呆然とし、明正寺が、どうしたんですか？　と聞いた。上原はに引き攣った笑顔で「すみませ

ん用事が……」と歯切れが悪い返事をし、明正寺邸を出た。

「瞳真ですか？」

車の前まで見送りに来た明正寺が上原にそう言った。上原は車に乗り込もうとしているところを中断して、はい。と返す。

「本当にすみません」

上原は「大丈夫です」と返し、車に乗り込んでからウィンドーを下げ、明正寺に「ありがとうございます」と残して車を進行方向にむけて発進させた。

dazzle trash

「だからオレはやってねえつつつてんだろ。お前ら証拠だなんだつって現場見てねえくせに偉そうな口叩いてんじゃねえよ。現場にいたオレが言ってることを信用しないでなんで現場にいなかった奴の言うこと信じてんだよ」

拘置所に入るなり怒号が聞こえてきた。中にいた刑務官に案内され、明正寺瞳真がいる部屋に着いた。そこには倒れている一人の刑務官と、明正寺瞳真を取り押さえている二人の刑務官がいた。倒れている刑務官は酷く顔が腫れており、制服がぐちゃぐちゃになっている。明正寺瞳真に殴られたみたいだ。

上原は菅原に倒れている刑務官を近くの病院に連れて行くことを指示して、暴れる明正寺瞳真を止めに入った。ただ、今の彼を見ると瞳真、准一、隼人、杏奈の人格に誰も該当していない。

もしかすると、仮定しているもう一人の人格なのか？

上原と目が合った瞬間、明正寺瞳真は血眼になって上原に殴り掛かった。怒り心頭に発して敵味方の境目が分からなくなってきているのかもしれない。

大の男、二人を一斉に振り払って上原に殴りかかろうとした明正寺瞳真の右手を目に見えぬ速さで受け止めた上原はその手首を掴んだまま、後ろに回って台に明正寺瞳真を押さえつけた。しかしさっきからこの手法で刑務官に押さえつけられていた瞳真はとくに解縛術(?)をあみだしていたようで一筋縄ではいかず、自由が利く左手を使って回避し、直ぐにまた上原に殴りかかった。

「瞳真を守るためだなんだ言って何もしないくせに。アバズレもキチガイもガキも使えねえ奴ばかりだ。ここにいる奴全員殺してでもこっから絶対抜け出してやる」

怒り任せに上原に殴りかかるが、その怒りで呼吸が読めてしまい上原には一発も瞳真の固く握り締められた拳は当たらなかった。それどころか上原はもう実力行使しないと判断し、瞳真の隙を狙ってどこで修得したのか腹部の急所を狙って瞳真を墮とした。

刑務官に後を任せた上原はあっさりと拘置所を出た。そのあと近くの病院へ向かい、菅原を迎えに行った。

「これからどうしますか」

上原に拘置所でのことを簡単に聞いた菅原は、15時丁度を示している時計を見ながらそう聞いた。しかし上原は何事もなかったかのように落ち着きを払った様子で、「署に戻る」と言った。聞き込みをするとき上原は時々、このまま直帰してえなあ。とぼやくような先輩だった為、そのまともすぎる返答は菅原を驚かせた。

「どうしてですか？」

「ちょっと、調べたいことがある」

上原はさっき手に掴んだ明正寺瞳真の右手の感触を思い出していた。

1ヶ月前 ―VENUS―

十月十八日 午前二時二十三分。

心齋橋はアメリカ村の一角にあるクラブ「VENUS」を出入りしているのは、一年前の警察のガサ入れによって潰れてしまった同じ系列の「CLOVER」の常連客が半分を閉めていた。しかしVENUSは入店の際に客のIDチェック（偽造を防ぐ為にコピー不可）をし、店内には未成年が一人もない。従って「CLOVER」よりもナンパ目当ての客は少なく、年齢層も上がって仕事帰りのオフィスワーカーが出会いはなく純粹に音楽目当てと娯楽として集まっているようだった。

しかし店内の片隅に設けられているVIPルームはそういった秩序を守る必要がなかった。前のような法に触れるやりとはないにして、店内にいる若い女の子を引っ掛けて連れ出し、ただのラブホテル代わりに使われるのがこのVIPルームだ。今日も誰かが見つけた女の子の集団を言葉巧みに酔わせて、VIPルームに連れ込めた。

「翼あ、今日ブスな女多いんだよー、三人しか可愛い子いなかった」

そう言って湯葉みたいな顔をした男が連れ込んできたのは金髪、ブロンド、茶髪を執拗なまでに、ぐるぐるに巻いた化粧の濃さで本来の姿を八割は誤魔化した派手な女の子三人組だった。基本的に3人とも下着と変わらないくらいの露出度の高い服を着ている。こういった「いかにも」な女の子は確かに落ちやすい。特に、明正寺瞳真のような下手な芸能人よりも眉目秀麗な外観を持った少年がいれば、さっきまで警戒心剥き出しにしていた子も、酒の力が手伝わ

で一氣に落ちてしまうことが多かった。

三人の女の子と、翼がこれからなにをするのかといえ、なんてことはない。ただのセックスだった。

翼は、瞳真が性的虐待を受けているときに生まれた人格だった。

理不尽に体を押さえつけられ、爪が肌に食い込んで皮膚が割れ、中の肉に爪先が入り込むくらい硬く体を握られて自由を奪われ続けた。その間で行われる性行為は悪夢だった。瞳真の肉体は傷だらけになって、涙を流し続け、声が枯れても尚、叫び続けて、そのあまり吐血したことだってあった。

「ねえ、あたしの家に来ない？」

セックスが終わったあと、相手だった一人の女が翼の耳元でそう囁くように言った。そのあと、これあげる。と彼女はビジネス用ではなくカードみたいに透けた素材の名刺を翼に渡した。それを受取り、翼は面倒臭そうな口調で「リオナ？」と聞いた。

「本名はエミリって言うの」

恋人のような甘える仕草で身を翼に委ねた。翼は不服そうに苦虫を噛み潰した表情でぐっと堪えている。

「ここ落ち着かないし、あたしの家広いから、ねえ、来て」

適当でいかにも興味なさそうな返事をしたあとエミリが何かを言おうとしたが、横から花園奈津子が「エミリってばツバサ独り占めしてずるーい」とあったま悪そうな発言をして割り込んできた。す

るとそれに便乗するように、この三人の中でも翼が一番可愛いと思
った桑名すずさえも割り込んできた。

三人で翼を取り合い、三人とも声質はよく似ていたため喧しい程に
声が高くて翼は、うるせー。とやる気のない声で相手にせず、まる
で傍観者のようだった。

翼が、じゃあ、みんなでエミリの家行こ。と言うことで、四人は
エミリの家に向かった。

1ヶ月前 ― 発生 ―

城東区にあるそれほど田舎でもない街に構える五階建てのアパートの三〇五号室。その浴室で、じゃんけん勝負に勝ったらしい桑名かずと翼が、他人の家だというのに性行為に及んでいた。荒い息遣いとうるさい程に響く女の嬌声が翼の性欲に爪を立てて絶頂に至らせる。

浴室の中が蒸気で充満する。結露した鏡に映った曇りガラスのドアの向こう、翼は人影らしきものを見たような気がした。

咄嗟にドアを開けたが、洗面所はスライド式の木目調のドアが締めまり、洗面台、チェスト、洗濯機が置かれているだけ。浴室のドアは内開きだから後ろに隠れることも出来ない。

翼の後ろで、どうしたの？ と聞くすずには翼は大きい手で頭を撫で、なんでもない。とドアを閉めた。

「体洗うとこ見られるの恥ずかしいから先に上がって」

すずがそう言ったことで翼は浴室に彼女を残し、ジーンズと黒いシャツに着替えて洗面所を出た。しかし、リビングは真っ暗だった。本来なら川島エミリと花園奈津子が待っているはずだが、カーテンもしっかり閉められたこのリビングには物音さえしていなければ、人気さえも感じられなかった。

エミリを呼ながら翼は部屋のスイッチを探しながら壁を伝って歩いた。しかしどこにもスイッチにあたらない。それどころか素足に何か冷たい液体のようなものが付着した。

水でも零したのか？ 翼はエミリを呼び続けるが応答がなかった。奈津子とコンビニにでも行ったかと思ったが、中に人がいることを知ってわざわざ灯りを消すだろうか。

「リオ……っ、痛って……。」

何かにつまづいて前のめりに倒れたらしい。カーテンも閉まっているようで月明かりが差し込まず、自分が何に躓いたのかも分からなかった。

「痛って……。なんだ？」

足の裏が切れるような感覚が走った。何か冷たい固形物を踏んでいるみたいだ。それを左手に取り、改めて感触だけを頼りにそれが何かを考えた。ぬめついた液体が付着している何か、硬いもの。冷たくて、生暖かくて気色悪い。

翼は立ち上がって慌てて部屋のスイッチを探した。どうしようもない不安に駆られ、焦りが手伝い、息遣いも荒くなって肘や腕に何かが当たり、明らかにガラス製のものが落ちようが割れようが壊れようが取り敢えず灯りをつけるのが先だった。

それでも、灯りをつけても事態は悪化するだけだった。

川島エミリの腹部が破裂したように中の物が血液と一緒に飛び散り、左目の眼球にはアイスピックが突き刺さり、花園奈津子は、首を斬られて倒れていた。

翼の喉から声にならない悲鳴が僅かに響く。体が拒絶反応を示し

て言うことを聞かない。記憶がフラッシュバックして体の神経という全神経、全細胞が「恐怖」を覚え、動くことが出来なかった。

洗面所のドアが開く音がする。桑名すずだ。翼は咄嗟に「開けるな」と怒鳴ったが既に遅かった。

「つ……、翼がやったの？」

翼がさっき拾ったのは、血にまみれたナイフだった。

逃げようとするすずを翼は追いかけ、オレじゃない。と弁解しているが、現にナイフを持った人間と、血まみれになっている死体があればナイフを持った人間を疑うのは当たり前のことだ。

翼はナイフを放り投げて部屋から逃げようとするすずの腕を掴み、床に押し倒した。泣き叫ぶすずの口を手で防ぎ、弁解することも知らない翼は結局すずに暴力を振るうことしか出来なかった。

殴ってすずを泣き止ませて、その場凌ぎに黙らせようとする。他に手はあったかもしれないが、翼が得たものは、自由を奪い、相手を拘束して行われる強姦と暴力だった。

翼自身も何が起ったのかよく把握していない。出て来たら女の子二人が死でいたのだ。それを目撃した少女は泣き喚き、それを黙らせたい一心で翼の振るう暴力は失速するどころか加速し、翼は自分で自分を止めることが出来なくなっていた。

翼————。逃げよう。

心臓が高鳴る。ハッと我に還った翼の目の前では、桑名すずの顔

が見るも無残に醜くなっていた。ただ気絶しているだけだろうが翼は「殺してしまった」と信じ込んだ。

翼はそこから逃げ出した。

血痕がこびりついた手を硬く握りしめたまま、泣きながら。

言葉遊び（前書き）

一部不適切な表現を用いています。作品上の演出のために使用していますのでご理解下さい。

言葉遊び

―― 現在 ――

資料片手に考え込む上原にコーヒーを差し入れたのは菅原だった。ふと気付いてこちらを見下げている菅原に、上原は「ああどうも」と声を出した。戻ってからずっと資料と睨めっこばかりして久しぶりに出た声は恐ろしく野太かった。自分でも驚いたのか、そのあと地味に咳払いしている。

「何か分かりました？　　というか、何を調べてるんですか？」

「いや……、ちょっと気になって」

スウィブルチェアの足についているローラーが地面と擦りあってキュツと音がする。

上原は資料を散らかったデスクの上に置いて、開いているところを菅原に見せながら「使用された凶器に明正寺瞳真の左手の指紋。」と書いてあるところに指をさした。これがなんのこっちゃ分からない菅原は「これが何か？」とキョトンとしている。

「さっき拘置所で明正寺瞳真が殴り掛かってきたとき、右利きだったんだよな。特に左手が負傷しているわけでもないのに、わざわざ不利になる方の手を使うなんて妙だろ」

「確かに、そうですね……。でもほら、右手で押さえつけて左手で刺すっていうことも考えられますけど」

そういわれたらそこまでなんだけど、という文句を溜め息に代えて深い息を吐いた上原はガキやアバズレやキチガイという発言を気に掛けていた。瞳真を傍観的に呼んでいたところを考えてあれは基本人格ではない。だとすると他の人格になる。

「菅原」

「はい」

「キチガイってなんだ」

「米軍基地の外ってという意味もありますが。基地外」

あの場に及んで米軍の話をしていたとは思えない。

「も、ということは他の意味もあるんだろうな」

「精神病患者や障害を持った人を嘲るときに使う人もいますね。差別用語です。昔あったでしょ。地下鉄駅構内で化学兵器を漏洩させて死者と大量の負傷者を出した事件。その黒幕だったカルト宗教団体の教祖がテレビで気違いだって公言させています」

「ああ、ああいうのを……、」

気違いという言葉で濁した上原はそのあと「アバズレって？」と尋ねた。

「暴れ者の「あば」に、世間擦れの「ずれ」が組み合わさって「阿婆擦れ」ですね。阿波の漢字が当てられたのは中国で老婆のことを

「阿波」と言い、年老いていくことを擦れていくことを重ねたんだと思います。元々、あばずれという言葉は男性に使用されていたものですが、こういった経緯で女性の、特に売春婦の蔑称に転用されたのかは分かりません」

「ガキって？」

「元々は仏語です。餓鬼は常に餓死しても可笑しくはない極限状態にいたので食べ物を貪ろうとしますが手にとった瞬間、食物は火に変わるので満たされることはありません。その食を貪ろうとする強欲なところが子供に似ているので蔑称として転用されたところでしょうか」

散々聞いておきながら上原は、ああそう。とガキみたいにふんぞり返り、ブラックコーヒーを一気飲みした。しかし喉にそれを通して改めて舌に残ったコーヒーの味を認識すると甘かった。ただクリップを入れていないだけで角砂糖5つ投入された見掛け倒しのブラックコーヒーだったようだ。

「あれ？ 砂糖いりませんでした？」

そう言った菅原に、いや……。と強烈な甘さで呂律が回らなくなっている上原手元にあった爽健美茶で口直しをし、本題に戻った。

離人症である准一をキチガイとし、売春婦の子供である杏奈をアバズレとし、隼人がご飯を貪っているところは見たことはないが一応、極普通の高校生Ⅱガキとすれば、あの明正寺瞳真はその三人の人格に該当しないことになる。

「もう一人の人格か……？」

その上原の声を聞き逃した菅原は、「もし明正寺瞳真の有罪が可決されれば、実父と義父のいる場所に行くってことになるんですよね」と低い声で話した。義父は殺人と監禁を犯して刑期は無期懲役で未だに出所の目処はたっていない。それに実父は息子を虐待したあと、仮釈放中に誘拐及びわいせつ行為の容疑で再逮捕。

一気に空気が悪くなった上原と菅原は、どうしたものかと頭を悩ませた。そのあと上原は何の気なしに明正寺瞳真の実父である嵯峨根博昭の資料に目を通した。

「もう直ぐ出て来るんですね、嵯峨根博昭」

菅原が上原の横にあるデスクからスウィブルチェアを引っ張りだして座り、上原が広げている資料に目を通していた。

「満期を勤めた受刑者がまた犯罪に手を染めて刑務所に帰ってくるのは約6割。改悛が認められて仮釈放された奴等より多い」

「冤罪でフォックスリバーに返ってきたベリックが可哀想ですよね」

ここで全く関係のない海外ドラマの話を持ち出す菅原の声は何故か落ち込んでいて真剣な顔つきだった。一拍間をおいた上原が無言で菅原を閉じた資料ファイルでド突く。

色々と言いたいことはあるだろうがあまり突っ掛かつては菅原の思う壺、のような気がして勘に障る上原は「出来ることならさっさと出て行って瞳真と入れ違いになった方がいいのかもな」と言った。上原の中では明正寺瞳真が犯人だと認めているよりは、もうなす術がないと諦めも備わっているようだった。雑貨屋で二千円で購入した洒落た按摩器で肩を揉んでいるあたりやる気がなくなっているのがよく伝わる。

「やる気なさ過ぎですよ」

「いややる気はあるんだけど……、どうも頭が働かない」

「糖分足りてないんじゃないですか？ 血糖値下がって死にますよ」

「倒れるとかそんなレベルじゃねえの？」

「なにか食べます？ チョコレートくらいならありますけど」

「お前なに常備してんだよ」

「生活安全課の子から貰ったんですって。個人的には買いませんよ」

「買いそうなのにな。なんだっけ……、ああ、小食系男子？」

「草食です」

いつまでたっても出口のない会話に2人揃って溜め息が出ていた。

いつまでも一容疑者に固着して裁判を長引かせてもらうわけにはいかない。それにもう裁判所は明正寺瞳真が被疑者と確定していると結論を出している。それに平行して世間ではこの事件は風化されつつあった。

別件の用事で呼び出された菅原は部屋を出て行き、上原は溜まっていた雑用を片付けたあと、上着を羽織って帰る準備をした。

お先にー。と残っている上司や先輩に挨拶をしてフロアを出て行くこうとしたそのとき、丁度資料室から帰ってきた菅原と出入り口で肩がぶつかった。上原は上原で何故かベルトの通し穴を今頃なおしていたし、菅原は手に持っていた資料を読んでいた為、お互いがお互いの存在に気付かなかったのだ。

「あ、すみませ……、あ、上原さん。帰るんですか？」

「お前は？」

「僕はちよつと……」

「何かあったのか？」

菅原は少し考えたあと「ええまあ……。ここ、見て下さい」と持っていた資料を上原に見せた。

広げた資料の箇所に添えた菅原の指先には「スパイラル」という片仮名があった。概要を見るとただのフレンチレストランのようだ。菅原が受け持っている別件の事件ではここで強盗事件が起きたらしい。

「ここ、前はタチュー・ピアススタジオだったみたいです。さっきオーナーから聞いたんですけど、強盗はこの店ではなく前のそのタチュー・ピアススタジオの彫師に用があったみたいなんです。仲介業者もいないから、経営者同士で店を受け渡したみたいですね」

「その彫師は」

「今はもう引退して子育て中みたいです」

「お……、女っ？」

「一応その人の住所も聞いていますが」

聞いた住所をその場で書き留めたのだろう、ブラックスーツの内ポケットから白い紙切れを指と指の間に挟んで取り出したそれを上原に見せた。

「どうしますか？」と一応ケツに疑問符をつけているものの、上原の表情を見れば答えは聞かなくても分かる。

「事件には直接関係ないだろうけど」

力の抜けた笑みを浮かべて上原はそう答えた。菅原は、じゃあ荷物取って来ます、と一度デスクに戻り、そのあと二人は署を出た。

北北西に進路をとれ。

「ここ右ですね」

途中でカーナビが当てにならないと気付いた、レガシイの運転席に座る菅原は、音声が「次、百メートルを左です」と言っているのを完全に無視して百メートルも走らずに右折した。すると築五年以内だろうか、未だ新築同然の十四階建てのマンションが見えてきた。マンションの名前とメモ用紙に書き留めたマンション名と一致している。

「これですね。行きましょう」

助手席を見ると上原は寝ていた。そこを菅原は無意味に本気で殴って奴さんを叩き起こした。冷水でも浴びたかのように慌てて起きた上原の第一声は「リチャード！」だった。

「しっかりして下さい。行きますよ」

セキュリティが万全に整っているのだろうか、マンションの中に入るまでに第一関門の自動ドアは簡単に通っても第二関門の自動ドアは、インターホンで住居者から開けてもらわなければ突破出来ないようだった。

菅原はくしゃくしゃになったメモを見ながら部屋番号を押して呼び出しボタンを押した。呼び出し音が二度鳴ってスピーカーから男の声が聞こえる。

「夜分遅くにすみません。大阪府警の者です。少しお話があるんですがよろしいですか？」

「ああ大丈夫です。どうぞ」

まるでクイズにでも正解したような音が鳴って第二関門の自動ドアが開いた。明正寺の家とはまた違う感動が上原に芽生える。

「何階」

「十二階です」

ホテルのようなロビーを歩いた先に、またホテルのような見た目のエレベータに乗り込んだ。12 とあるボタンを押してドアが閉まる。その間ずっと無言のままエレベータは十二階に着いた。

一二〇七号室。表札には「長谷川」とあった。ここ？ と上原が聞くと菅原が、ええ。と返事し、上原はインターホンを押した。押し方が下手なのか、音がいびつだった。

ドアを開けたのは二人と同じ年くらいの若い男だった。ここに来るのが警察だと知ってはいるだろうが、ドアの外に立っている二人の一方はジャケットにジーンズを合わせた私服で、もう片方はブラックスーツ。「漫才師か……？」と言ってしまうのも無理ない。

初めて言われたその素直な感想に否定も肯定も出来ない二人は一度顔を見合わせた。

「大阪府警の者です。少しよろしいですか？」

菅原が警察手帳を提示し、男は、ちよつとすみません。と言ってドアを開けたまま、リビングに向かって声を上げた。

「潤さん、ケーサツの方来たみたいだけどー」

「上がってもらってー」

前を向きなおした男は、どうぞ。と言ってドアを全開した。上原と菅原は各々、失礼します。と一礼し、玄関で靴を脱いで中に入った。

Living La Vida Loca

中に入ると生後間もない赤ん坊を抱いた女性がいた。三十代前半、といったところだろうか。こげ茶の髪を緩く巻いた細身の美人な女性だった。

「どうぞ、座って下さい」と二人にそう促し、さっきドアを開けた若い男に、お茶出して。と仕事を与える。

若い男は、生茶とガラスコップを2つ重ねた状態で警察2人の前に差し出し、立ち退こうとしていた。そこを長谷川夫人が赤ん坊のオモチャらしきものを投げ、後頭部にヒットする。「ちゃんと持て成せ、バカタレ」と非常に厳しい態度だ。

「すみません、夜分遅くに突然」

「良いですよ。旦那も今日は帰って来ないので」

「え？」上原と菅原が声を合わせた。その同調具合に大人しくお茶をコップに注ぐ男が旦那と思われていたことを察した長谷川夫人は笑いながら「この子は私の弟子なんですよ」と言った。すかさず若い男が「いくらなんでもこんなオバサンとは結婚しませんよ」と付け加え、またオモチャを後頭部に投げられていた。「お前は引っ込んでろ」と身内には容赦ないようである。

「この子に見覚えありませんか」

上原が明正寺瞳真の写真をコピーしたものを長谷川夫人に渡した。凝視するまでもなく彼女は「ああ知っています。翼君ですよ」と

笑った。その何の気もなしに浮かんだ笑みも気になるが一番はその「翼君」だ。菅原が「つばさ君？」と尋ね、長谷川夫人は笑みを維持したまま翼の話をし始めた。

「大人しい子でしたね。背中と腕だから一日三時間に分けて週一のペースで通ってもらおうと思ったけど、一日五時間で良いから早く仕上げてくれて言われて、ずっと痛みに堪えている子でしたよ」

写真を上原に返したあと長谷川夫人が、彼がどうかしたんですか？ と聞いた。菅原はどう答えて良いものか迷っているが上原は黙ったままだ。

「あ、俺がピアスあけた子じゃん」

菅原の後ろを通っただけだろうが見えた写真でそこで立ち止まり、その光景だけで見れば「菅原の真後ろに立ってヤクルト飲んでる若い男」は、明正寺瞳真を見てそう言った。

「本当ですか？」

「なんか物凄いところにピアスあけたいって言うから冗談で、チンコにでもあけたらどうツスカあ？」

って言ったら、即決してたね。変な奴だよ」

物凄いところとオーダーがきて男性器を薦めたあんたも充分変だろという文句を飲み込み、菅原は長谷川夫人に向きなおして「この子が未成年だということはご存知ですか？」と聞いた。当然というべきか夫人は素っ頓狂な声を上げ、「身分証明証では拓海と同年だったはずですけど」と弁解するように話す。タクミ？ と菅原が

聞くと若い男が挙手して「俺です」と答え「二十一歳です」と付け加えた。

「上原さん、もしかしたら「つばさ」って未だ出てきていない人格のことなんじゃないですか？」

黙ったままの上原に菅原が話しかけた。消え入りそうな声で覚束ない返事をする上原である。眠たいのかもしれないが表情が強張っているが、声に覇気がないのは眠気の所為ではないっぽい。

「長谷川さん」

「はい？」

「その、つばさという子、いつ店に来ました？」

上原の質問に少し考えたあと夫人は結局、拓海に、いつだっけ？と聞いていた。拓海はヤクルトを飲み干したあと「去年の七月じゃなかった？」と言った。

「七月？」上原が過敏に反応し、拓海が自己確認をするみたいに「ああ。七月頃だな」と返した。それを聞いた上原は長谷川夫人を呼んだ。

「因みに？つばさ？という名前の子は他には？」

「一応、完全予約制なので今までお客さんの名前は新規、常連問わず取っていますので、そのリスト見れば分かりますけど。まあ私の記憶では確か翼という名前の子は、この子だけですな」

そのあと、明日でよろしかったら調べますけど？ と訊く長谷川夫人に、すみません。お願いします。と上原は力なく返事して立ち上がり、長谷川夫人と拓海に、ありがとうございます。といい、長谷川宅を出て行った。

C a c h M e I f Y o u C a n

早歩きの上原をなんとか追いついて後を追いかける菅原は運転席に座ろうとしたが、上原が既に運転席に座っていた。菅原は助手席に座り、未だシートベルトもしていないのにレガシイが発進した。

「どうかしたんですか？」

「一年前にガサいれしたクラブにも、つばさって名前の奴がいたんだよ」

「瞳真君なんですか？」

「分からない。ただ瞳真が刺青を彫った時期を考えると可能性もあるし、ただの同姓同名っていう可能性もある」

「ガサ入れたとき他の人に証言とったんですよね？」

「確かに、別室にいた奴だけがそこにいたつばさを知ってたけど、つばさが来たのはあの日が始めてで、周りも酒飲んで酔ってたから殆どそのつばさがどういった外観をしてたか覚えてないんだよ。一緒に酒飲んでたっていう女も覚えてないっていうし」

「嘘ついているという可能性は？」

「みんな、つばさって奴がいたことは覚えてるんだ。嘘つくなら存在自体誤魔化すだろ」

「あそうか」

「それに、女の証言からするとつばさは成人で、ただ酒飲んでただけだ。別室の隠し扉から逃げたんだろうが、警察側はそいつを捜査することもしなかったんだよ」

「どうして」

「めんどいじゃん」

そんな単純な理由かよと後輩ながらに先輩を下突きたい衝動に駆られていたがなんとかそれを抑え、「だ……、ったらそれ瞳真君じゃないですよ。成人してたんでしょ？」と言葉に差し替えた。しかし横で上原はへったくそな運転をあたかも安全運転かのような顔つきで「お前、この前自分で言っただろ。准一は二十歳だって」と菅原の考えを真っ向から覆した。つまりは、例え肉体が未成年だろうが人格は人格で年齢を持っているというわけだ。

「なら、どうやってつばさは身分証明証を作ったんでしょうか」

「コピーなんじゃねえの？ よくいるぜ。保険証コピーしたのを修正液で消して上から生まれ年変えてそれをコピーする小賢しい奴。IDチェックやってたクラブに通う高校生の殆どがそれで入店して補導だ」

菅原は少し考えた後、確かにそんな店もありますけど、と話すがどう考えても長谷川夫人が経営していた店が「コピーを許可するとは思えませんが」となってしまふ。流石に上原自身もそう思っていたのか、返答は同意を示していた。

3人の身勝手な人たち

翌日

「はぁ……、そうですか。ありがとうございました」

電話を切った菅原は横のデスクに向かう上原を呼んだ。

「長谷川さんから電話で、名簿には翼の名前は1人だけみたいです」

「身分証明証の件は」

「身分証明証はつばさが知り合いの人から借りたみたいです」

「その知り合いは」

「片山翼。昭和63年生まれの現在21歳。さっき拘置所に電話して、
て、

片山にカラオケ行くから身分証明証を少しのあいだ貸して欲しい
と言って半ば無理矢理借りたと、

准一から証言取れました」

「なんでそんなもん簡単に貸すかね」

「若い証拠ですよ。今の子ってウェブで簡単に住所とか本名や顔写真
真を平気で公開するでしょ。」

だから身分証明証も簡単に貸し借り出来ちゃうんですよ。

借りたのは保険証で、顔写真もついてませんからね」

お洒落按摩器で肩を揉んでいるサボリ気味の上原が自分のデスクに戻って立ち上がった。

そいつの住所は、と聞きながら黒のトレンチコートを羽織っていた。

今日は昨日より気温が高いからいつも着ているボアのジャケットは暑かったのか、

と菅原は妙な観察を始めながら片山翼の住所を口答している。

「じゃ、行つて来る」

「え、行くんですかっ？ 片山翼は今回の事件に関係ありませんよ」

「分かってるよ。けど、俺もお前も今回の事件は瞳真が犯人だって諦めたわけじゃない。」

それに、被害者の身内で割り出した容疑者は全員シロだ。だとしたら、被疑者の身内だろ」

菅原は少し考えた後、水滴を落とすように言葉を発した。

「瞳真君の知り合いですか？」

「瞳真を犯罪者にしようと目論んでいる真犯人がいればの話だけど、瞳真の証言を信用すれば、その線も浮上する」

菅原は短い息を吐いた後、スーツのジャケットを羽織って上原のあとをついて行くように部屋を出た。

署を出て駐車場に向かい、上原の車に乗り込む2人だが上原は助手席に座っていた。

住所聞いたくせに運転しないんかよと菅原は不承不承と運転席に座った。

住所をカーナビに入力する上原を横に菅原はバックミラーを調節し、エンジンを掛けた。

アクセルを踏み、発車するが何故かブレーキが掛かって急停車する。

上原は菅原の後頭部をシバき、菅原は「すみません」と簡単な謝罪をして気を取り直して車を発進させた。

「東大阪市ってまた遠いですね」

「さっさと走れ」

自分は自分で立て膝立ててPSPで遊んでいるではないか。

なにやってるんですか、と語気を強めて訊く菅原に上原は平然とした態度で「戦国BASARA」と答えている。

なんかよく分からんがこの前みたいに寝てくれた方が未だ良いかもしれない。

T r i b a l

道を迷い、紆余曲折を超えて一時間後に片山翼のいるアパートにレガシィが到着した。極普通の住宅街にある団地。六棟の四階、二号室に「片山」と表札があった。

インターホンを菅原が押して相手が出るのを待った。が、インターホンから人の声が聞こえるどころか突然ドアが開いて警戒心のなさにくちが当惑してしまう。出端を挫かれたというか一步出遅れて菅原は、ドアを開けた豆みtainな顔をした少年に警察手帳を提示した。

「大阪府警察の者です。ちょっとよろしいですか」

「俺何もしませんけど」

「身分証明証渡しちゃったでしょ。この子に」

そう言いながら菅原は背広のうちポケットから一枚の写真を彼に渡した。そこにはバストアップまでの瞳真が映っている。それを見て片山は「翼じゃん」と言い、まるで友達にでも訊くかの如く、元氣してんの？ と聞いている。

馬鹿馬鹿しくて返事する気になれない上原は咳払いをし、「一年前の十一月にクローバーっていうクラブに出入りしてなかったか」と聞いた。

「クローバー？ さあ、行ったことねえなあ」

「どこでこの翼と会ったんだ？」

「レイヴだよ。女回してくれるって言うから仲良くなったんだ」

「知り合いに龍の刺青をした奴はいないか」

その質問に片山は目を細め、限りなく豆に近い表情で唸りに似た声を出して考え込んでいた。

「そういや腕に龍の刺青彫った奴がいたなあ」

「それはこの翼じゃないんだな？」

「違うよ。翼の龍はトライバルだろ」

「なんだそれ」と菅原に聞く上原。

「民族、部族という意味がある「Tribe」の形容詞です。音楽でいうトリッキー・マーティンなんかそれっぽい傾向があります。模様に關すると東南アジアのボルネオ諸島などで古くから伝わる民族のシンボルマークであり、地域密着型の風俗ですね」

「そのトライバルじゃない龍の刺青をした奴と、この翼に面識はありますか」

「どっかのクラブで二人見た気がする。あいつ、翼のことムカつくって言って色々嗅ぎまわってたし」

「ストーカーか？」

上原が眉間に皺を寄せて反応する。片山は首を傾げながら、似たようなもんだな。と言い、しかめ面を浮かべて「翼って養子なんだろう？ 医者の息子だとか、本当の父親が犯罪者だとか、色々知ってたけど」と続けていた。

「それで、そいつの名前は」

「覚えてない」即答だった。

脱力した二人は、そうですか。と同調し、上原が代表して片山に札を言い、聞き込みを終了させていた。しかし上原は突然ドアを閉めようとしている片山を呼び止め、「因みに、トライバルじゃない方の刺青青年をどこで見ました？」と尋ねた。

「クラブだけど」

「どこのだ」

「難しい英語だったから読めなかった。えーと、あ、ラブだよ。ラブ」

馬鹿なのか知らんが恥ずかしい単語をいとも簡単に口に行っている様子を見ると上原は、その場から動き、もしかしてこうじゃないのか、とメモ帳を取り出して署から配属されているマスコットキャラクター付ボールペンで「CLOVER」と書いてそれを見せた。すると片山は手を叩いて、「ああ！ これだよこれ！」とはしゃいでいる。

そしてまた適当過ぎる札を申し付けて上原は今度こそ階段を降り

て
行
っ
た。
。

Can We Go Back

運手席には上原が座っていた。レガシイは物凄いスピードをつけて大阪府警に戻っている。助手席に座る菅原は「スピード違反で捕まったら僕ら布施警察から顰蹙買いますよっ」と焦っていた。

署に戻った上原は資料室に向かった。そこで強姦被害にあった女性性の被害者リストを取り出し、検索している。菅原は一人突っ走って単独行動する上原に痺れを切らし、何故か上原の頬を本気で殴った。

「何を一人で進めてるんですかつ」

無防備なところを殴られて地面に叩きつけられた上原は「お前の方こそ説明しろ」と苦し紛れに返した。怒り任せとはいえ、先輩を2度も殴ってしまった菅原は今さら焦って謝罪するが、大体上原さん空手有段者のくせに受け身になってなさ過ぎですよ。と謝罪するつもりゼロではないか。

「ただの勘だよ。間違ってるかもしれないじゃんか」

立ち上がりながらそう話す上原に菅原は強気の態度で「間違ったら、ごめんなさいで良いじゃないですか」と言いきった。

二人しかいない資料室に沈黙が宿った。一秒、二秒……、と永遠に続くのではないかと妙な不安が菅原の脳内に過り、上原が息を吸い、吐く声が聞こえた。

「菅原」

「はい」

菅原の頬を思いっきり上原の右手が殴った。

後ろにしりもちをついて倒れた菅原を残して上原は何事もなかったかのように話を始めた。視線を手に持った資料に落としている。

「お前は出世して全国まわって、総監になるかもしれないんだよな」

それは上原がノンキャリアで菅原がキャリア組であることを話していた。菅原は切れまわした口内から出た血をシャツの裾で拭きながら立ち上がり、「いやあのその……」と掛ける言葉が見付からないでいる。

「今思えば、お前が警察になったなんて信じられないな」

「え？」

どういうことかと聞こうとしたとき上原が資料を手はこの部屋を出て行った。また遅れをとった菅原は後を追いかけて、上原に何の資料を持ったのかを訊く。それは瞳真と、瞳真の実父である嵯峨根博昭と義父の明正寺千秋の資料だった。

「どうしてそんなものを」

「瞳真が被疑者でなければ、他の人間が3人の女性を殺したことになる。真犯人がただの通り魔ではなかった場合、瞳真を犯罪者に仕

立て上げようと目論でいる可能性もある」

「何の為に……」

「分からない。ただ、瞳真の実父は犯罪者だ。それに、瞳真の交代人格である翼と仲の悪い刺青をした奴は瞳真のことを嗅ぎ回ってたんだ。そしてその刺青野郎の名前を片山は、覚えてないって言ったことを考えれば、一年前のツバサは単なる偽名」

「どういうことですか？」

「片山の名前は翼だ。クローバーを出入りしている刺青野郎の名前を、あいつは、知らない。じゃなく、覚えてないって言っただろ。いくら馬鹿でも自分と同じ名前を忘れるはずがない。つまりは、一回本名を聞いてるんだよ。分からないのは、何故その刺青野郎が「つばさ」と偽る必要があったのか。仮に今回の事件に関係していると考えたと、もしかすると瞳真に罪を着せる必要があった……」

考え込んでいる上原の傍らで電子音が鳴り響いた。マナーモードにし忘れていた上原の携帯が鳴り響いているのだ。上原はトレンチコートのポケットに手を入れ、携帯を取り出し、ディスプレイに浮かぶ名と電話番号を見た。拘置所からだ。

「はい上原です。はい、は……、えっ？」

携帯から耳を離して菅原の方に振り向いた上原の顔は強張っていた。

「なんですって？」

「瞳真が拘置所から逃げた」

逃走中

息遣いが荒く、煙草を吸うようになってから体力が続かない。見張りの刑務官を殴り、拘置所を出たとはいえ、これからどうするかも目処が立っていない翼は兎に角走った。

金は持っていない。周りは何もない場所から住宅街に出たはいいが、ここがどこかも分からない翼は走るのをやめても兎に角歩くしかなかった。

買うつもりもないが少しの期待を持って路地に佇むあまり見たことない飲料会社の自販機の側面を蹴った。当たりつきや、一部の製品のデザインが一昔前のものだから自販機自体が古いと踏んだのだろう。

自販機は翼が与えた衝撃でガコン、ガコン、と商品を出し、カシヤン、カシヤンとカメラのシャッターでも連打したかのようにお釣りの受け取り口に金銭を落とした。

出て来た商品は桃と林檎とマンゴーをミックスした飲料水と、緑茶。金銭は十円玉二枚だった。もっと出ないかと思ったが、通りかかった親子連れの母親が不審そうに翼を見るため、翼は大人しく金銭と商品を奪ってその場を去った。

一軒家、一軒家、豆腐屋、コンビニ、人が住んでるのかさえも怪しい推定築四十年以上の二階建ての木造アパート。そして十七時になった今、どこからか近くでチャイムが聞こえた。久しく聞いている音だ。この近所に学校でもあるのか、翼は歩行先を変え、チャイムが聞こえた方へ誘われるように歩き出した。

飲み切った緑茶の缶を、アスファルトの側面にある柵で区切られたドブに捨て、もう一本のジュースをどうしようか考えていた。さっきの緑茶で随分喉の渴きは潤ったが、ここでジュースなんていかにも甘ったるいものを飲めばまた乾いてしまう。しかし捨てるのもなんだかな……、とどうすることも出来ないでいた。

「置いてくれば良かった……」

翼の独り言が聞こえたのかそうじゃないのか、前を歩いていた小さい女の子が後ろを振り返った。瞳真の外見を見て顔が引き攣っている。金髪に、鼻にあいたピアスと耳に至っては数知れず、半袖シヤツから出ている腕の関節まで掘られたトライバルの龍の刺青は小さな女の子に危機感を与えるには充分だった。

翼は妙なものに誤解を与えたなと一種異様の表情を浮かべた。女性に対しては性対象としか見ていない翼だが女の子供に危害を与える気は少しもない。

前を歩く、度々振り返っては翼を見る女の子を追いつきと早歩きをして少女の横に並んだ。そのとき女の子にすつと持っていたジュースを差し出す。女の子は呆然というか、慚然とした態度でそのジュースを手にとり、翼は手を離して女の子を追いついた。

チャイムが聞こえたのは中学校だった。

門前近くまで来ると部活帰りの中学生が中々返らずに部員同士喋っていたり、部活に入らず授業が終わり次第真っ直ぐ家に帰って私服に着替えた生徒がまた学校に集っているようだ。

その、いわゆる「帰宅部」の生徒たちに混じっていた、金髪よりは黄色に近い、明らかに自分の手で染めたらしい、パサ付いた髪に短いプリーツスカートとブラウスを合わせた格好の女生徒が翼を凝視していた。観たところ在校生というよりは卒業生か、全体的に化粧が濃いとその濃さがどうも方向性を間違っている。自分がどんな顔をしているのか自覚症状のないその女子高生が、門を通り過ぎて行く翼に話しかけた。敬語なんて使っていない。「シカトしてんじやねえよ」と喧嘩腰だ。

翼は准一に、知り合い？ と訊くが准一は「こんな化粧の酷い知り合いはいない」と即答する。訊いてもいないのに杏奈は「こんなブスと友達になる奴は頭おかしい」と言い、隼人も「こんな制服見たことない」とそれぞれ自分の知り合いではないことを話した。だとすると瞳真か？

「……、誰？」

Girls' Talk

何の躊躇もなく女子高生にそう切り返した。すると女子高生は周りが笑い出したのを気にして、後に引けなくなったのか怒鳴り声で文句をまくし立ててきた。自分の話をせず、不法侵入だ不審者だと喚いているあたり瞳真の知り合いではないっぽい。ただの輩だ。周りが年下で、妙な高揚感があったのか、つい翼に話しかけてしまったって考えるのが妥当なところだろうか。

翼は面倒臭そうな顔をして相手にせず、その場を足早に去った。いや、去ろうとしたのだが突然目眩がしてその場でしゃがみ込んでしまった。意識が混濁する中で中学生とその女子高生が、なに急に？ と騒ぐのが聞こえる。走り過ぎか、ろくに食事をとっていないかったのに全力疾走したから体に異変が起きたのか、朦朧とする頭で色々と考えてみたものの、フェードアウトするように翼の意識は遠のいた。

「あたしが不審者ならあんたは変質者って感じ？」

肉体に異変が起きたわけじゃなかった。ただ杏奈の精神が上回り、杏奈の人格が前に出て来る為の頭痛だった。

突然しゃがみ込んだ人間が突然立ち上がって、女子高生の売り言葉に買って出た罵倒を浴びせるその一連の動作に中高生等は硬直していた。特に、女子高生はその杏奈の言葉に言い返せないようである。ぐっと歯を食い縛り、頬を紅潮させる。徐々に中学生らも杏奈の言った言葉の意味を理解したようで、中には笑っている子もいた。

「あんた自分の顔鏡で見たことないのお？　ブスだって言ってるんだよ、っていうかブス以外何者でもないよね。化粧でも誤魔化しきれてなくなぁい？」

一応、人格は杏奈なのだが肉体が男だから当然、声も男のよく通る低目の声だ。その男の声で発せられると多少の違和感を伴う口調を全くスルーする女子高生だった。あまりにも杏奈の言動に腹が立って口調に神経がいていないのか、周りの中学生が、おネエ？と瞳真を誤解し始めているのにも気付いていない。

「っていうか、あんただって充分不法侵入じゃない。門の中入って来てるし」

女子高生のローファーは確かに校内に入っていた。「あたしは卒業生だからいいのっ」と悔しそうに言い返すが即座に杏奈が「あたしも卒業生だけど？」と嘘を並べた。

女子高生は後に引けなくなって馬鹿の一つ覚えみたいに杏奈を指差し「不法侵入っ」と何度も叫んでいた。その様子は、彼女を先輩と慕っていたであろう、中学生から顰蹙を買う言動でみんな引き始めていた。

（杏奈なんで出てくるんだよ。喧嘩なんでしてないでさっさと違う場所行こうよ）

隼人が及び腰になってそう言う。しかし事なかれ主義の准一は（翼に代わってもらえよ。うるさくて殴って終わりだよ）と無責任なことを言う。しかし翼は（いや、これはこれで面白いし、良いんじゃないね？）とベクトルの違う無責任発言をする始末だった。

（杏奈あ、さっさと准一か翼に代わってよ）

「嫌よ。どうせこの女だって瞳真に取り入ろうとして話しかけたに違いないもん。瞳真はあたしの男でしょっ。瞳真に一瞬でも好意的になった女は……、潰す——っ」

そう言って杏奈は喚き散らす女子高生と口論になり優勢に立っていた。脳内では翼が、あれ、杏奈って千秋のこと好きじゃなかったっけ？ と疑問を抱き、准一が、男だったら誰でもいいんだよ。と解決しようとし、っていうか顔で選んでんじゃない？ と隼人が結論に至った。

男三人は黙ったが杏奈の、言われたら三倍返って来る言い返し攻撃は止まることを知らない。

「だからあたしに指図してんじゃねえよブス。さっさと帰ってそのぶっさいくな面どうにかしろよ。まああんたの場合なにしたらって手遅れだろうけど」

その言葉が決め手となって、女子高生は泣き出し、杏奈は勝者（？）となった。途中、杏奈の言いたい放題な性格に中学生は引き始めていたが。

卒業生と在校生を残して杏奈は校舎に入った。下足室を通って校舎が囲んだ中庭に入った。小さい噴水があって休めるようにベンチがところどころある。そこを歩いて行くと北校舎の裏側に來ていた。そこは中庭と違って伸びっぱなしの草が一面に広がった、グラウンドと呼ぶには小さい、無意味な空間だった。

E i n g a n g

冷たい北風が吹いて体温を奪う。西日の強い光だけが頼りで、杏奈は無意識にその場をただ歩き、翼に話しかけた。

「ねえ、どうして学校行こうとしたのよ」

（別に……、他意はねえよ）

「ふうん」

（っていうかオレ警察から逃げてんだけど、分かってる？）

「あ、そうだっけ？ 忘れてた」

そう言って杏奈は小さく笑った。その乾いた笑い声は普通の女の子みたいで、可愛いものだった。笑って、ふと止まって、空を見上げた。十七時を過ぎた秋空はもうさっきまでの夕立の面影はなくて、空に浮かぶ曖昧な輪郭をした月が綺麗で、思わず杏奈は見惚れていた。

「翼」

（なんだよ）

「戻ろう」

（……。はあっ？ お前オレの努力踏み躪るつもりかよっ？ 元はと言えばお前らが何もしなかったからオレがこうやって逃げてやっ

たんだろっ?)

「……、じゃああんたに代わるわよ」

そう言って杏奈は自ら肉体から逃れ、入れ違いに翼が肉体を乗っ取った。そのあいだ瞳真の肉体は倒れこみ、生い茂る芝生の上で横たわっていた。

しばらくして翼の人格が肉体に着手し、自由に動かすことが出来るようになったが、それでも翼はここから数分のあいだ動かなかった。

「ちょっと、休憩する」

十分も二十分も動かないつもりはなかった。ほんの少し休みみたいだけだった。肉体を手に入れたのはいいが、肉体の疲れがドツと重みと化して襲ってこられては肉体どころか翼の精神が持たない。元々、翼の精神なんて壊れた瞳真の破片の成れの果てのような気がするが、翼は自我を持ち、自らの考えを持って行動が出来る。それが壊れた一部の破片にしては出来すぎているような気がする。

「な……、なんでお前がここにいるんだ……っ?」

男の野太い声が聞こえ、勢いよく腹筋だけを使って起き上がった翼の前に立っていたのは、ジャージ姿でスキンヘッドの二十代後半の男だった。翼は目を擦り、その男を繁々と見入る。

色んな記憶を遡っていくと辿り着いた。自分の周りを色々と嗅ぎ回って肉体の本名、そして養子だという情報を手に入れた――、

「動くなっ」

振り向くとそこには、上原と菅原が銃を構えて立っていた。気がつけば周りには二人と違って制服を着た地元の警察が周囲を囲っているではないか。全員が翼に拳銃を向け、今にも翼が下手なことをすれば発砲しそうだ。

翼は逃げようとしたが瞳真の肉体が言うことを聞かず、立ち上がることも出来なかった。どうしよう、どうする、どうしたらいい。何も考えられない翼を余所に、ジャージ姿の男が我先にと逃げた。

「確保っ」

上原が声を上げ、男が逃げようとした先にいた二人の所轄の警察が男を捕まえ、腕に手錠を掛けた。

「加藤耕平。殺人の容疑で逮捕する」

Do You Remember Me

大阪府警と書かれたパトカーが続々と到着し、加藤耕平が連行された。菅原の話によると加藤は十三年前、嵯峨根博昭に誘拐された加藤晶子の兄だった。後に加藤が供述した内容によると、嵯峨根博昭をどうしても死刑にしたかったが適わず、十年以上の懲役でなんとか十三年間、牢獄の中で過ごしてもらったが、それでも怒りは収まらなかったと話した。

何年後かして翼の人格をした瞳真に出会い、その翼の言動が気に入らなかったというだけで翼のことを色々と調べているうちに解離性同一性障害には届かなかったらしいが、本来の名前が明正寺瞳真であることと、養子だということに辿り着き、実父が自分の妹を犯した嵯峨根博昭の息子だということを知った。

一気に復讐の念が燃え上がり、どうにかしてあと何日かで出獄する嵯峨根博昭の代わりに明正寺瞳真を刑務所に入れたくて、事件当日、翼のあとを追いかけて、翼が桑名かずと浴室にいた隙を狙って、川島エミリと花園奈津子の殺害に至った。そのあと部屋の隅に身を潜ませ、翼が逃げたあと桑名かずの殺害に及んだという。

呆然とする翼に上原は「手」と言って翼に手を出すように言った。大人しく手を出し、その手首に手錠を嵌めながら上原は「一応、また署に来てもらう。反省さえすれば書類送検で済むから」と言った。

顔を俯かせている瞳真の目からボロボロ涙が出ているのを上原が知ったのは、上原の手に暖かい水滴が落ちたからだだった。菅原は「全くの悪人ってわけじゃないんですね」というが、上原は察したようだった。誰が泣いているのか。

「刺青を彫ったのは君だな。明正寺瞳真」

深く頷いた瞳真は、涙が邪魔して上手く喋れないようだった。

「覚えておきたくて……。翼や、准一も杏奈も隼人もみんな、忘れたくないから」

それから瞳真はパトカーに同乗し、大阪府警で同じく事情聴取されている加藤の容疑が明らかになったところで、すぐに釈放はされなかったが今日一日だけ署にいてもらうことになった。

署に戻った菅原は当直で残り、遅番でもないのに21時過ぎまで仕事をしていた上原は瞳真のことを気に掛けながら菅原の帰れコールで帰ることになった。

「お前、生意気になったよな」

署の出入り口で立ち話をする上原が真顔で菅原にそう言う。しかし奴さんは迷いのない目で「いや帰れっていうか、帰って休んでほしいだけです」と返す。そのあとの「だから帰れ」は「帰って寝て下さい」で良いんじゃないだろうかと上原は言葉に詰まっていた。

「あ、そういえば上原さん」

「ああ？」

「僕が警察になるとは思わなかったって、この前言ってましたよね？ それってどういうことですか？」

切望ビリー

菅原から視線を外して上原は五年前の夏のことを思い出していた。

未だ警察になって一年足らずの夜、託児所の火事で借り出されたことがあった。多過ぎる野次馬で消火の放水が届かない、邪魔が入るとの通報で野次馬の整備に警察が出動したのである。その中に上原がいたのだ。

押すな、押すなと注意を促しているよりは野次馬相手に本気で怒っていた上原の前に、ずっと前へ出てきた十八歳くらいの青年がいた。明らかに他の野次馬とは出で立ちが違う。声が震えて喋れないようだった。

「中に……、中に未だ妹がいるんですっ」

今にも飛び出して行きそうだった青年を上原は押さえつけ、青年は燃えあがる火に向かって何度も叫び続けていた。しかし消火活動が済んだ全焼した託児所からは見付かったのは焼死した死体のみだった。

「名前は」

野次馬が少しずつ減っていく中、呆然と立ち尽くす青年に上原がそう聞いた。か細い、力のない声で青年は小さく「つぐみ」と言うが上原は「君の名前だ」と聞きなおした。

「緑弥……」

「苗字は」

「菅原」

そう答えたあと菅原は涙を流し、固く拳を握り締めていた。何度も妹を守れなかった自分を責め

「仕事だからって預けるからこういうことになるんだ」と誰かを責めているようであった。

そんな人間が、まさか数年後、自分が働いている大阪府警の捜査一課に配属され、再会するなんて思わなかったのが上原の素直な感想だ。しかし菅原はあのとき名前を聞いた巡査が上原だと気付いていないようだった。

「まあ、どっちかっていうと弁護士とか検事っぽくない？ もっと金になりそうな仕事就いてそうじゃん」

何故か遠い目というか目を細め、口の端を上げて笑いながらそう答えた上原だった。菅原はムキになったというか少し気を荒立てて「僕が警察になったのは上原さんの所為じゃないですか」と答えている。これはこれで上原の表情が変わる。素になって、え？ なんです？ 訊いているではないか。

「まあ、上原さんは覚えてないでしょうけど」

しかし菅原は答えるつもりはないらしい。そのあと「それじゃ」と逃げるようにして踵を返し、署内に入って行った。後ろで先輩が情けなくとも「待てゴラァアアアッ」と叫んでいるが届かなかった。

短い息を吐き、踵を返して駐車場スペースに向かう上原の背に菅原の声が届いた。

「上原さん」

振り向くと菅原が玄関前に突っ立って笑いかけていた。

「お疲れさまです」

十八時間後、明正寺瞳真の無罪が裁判所で可決された。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3936j/>

切望ビリー

2011年1月28日20時07分発行